へ13
4352
2

新可笑記　巻二

目録

一　廣嶋も火宅九合忌
　武士の理は命とれす
二　宿女は人にしらぬ貧乏
　武士は名利長袖のす
三　胸はへし連判の座
　武士は一所のちからさ才一のす

×13
1352
2
<2003-150

四　共法の奥ハ文陳程
武士ハ其家風を嗜とす

五　飛鳥の振り物来れ為
武士ハ立業のまづハざる事

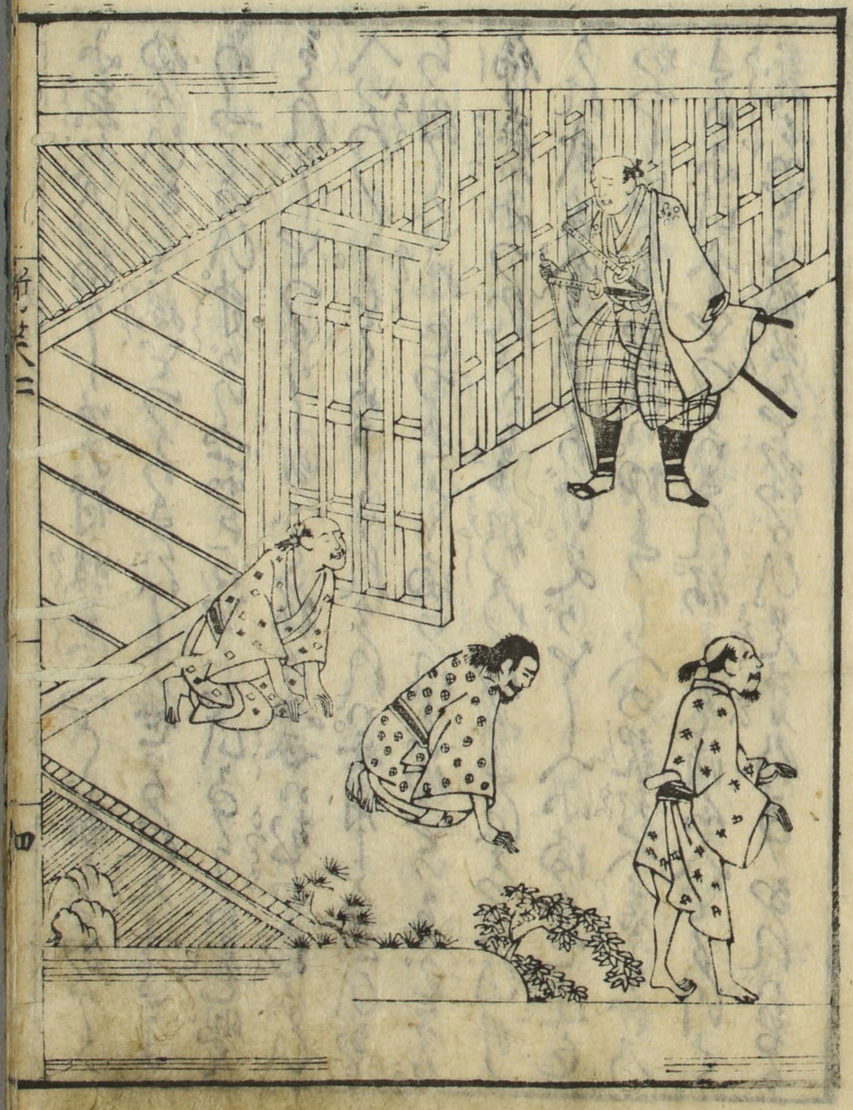
六　魂よばひ百の聖ひ
武士ハ世も道を立けるす

二　炭焼も火電乃合点

古代より鍛ぶに力をほろがしとすハ常なり懐
引締磨乃布立さらりさ御形まなつくり物を
家に見る綿乃あけがれぴしさ紀のゆふべよれ
絹きさ御高人あれハ又剣蔵乃荷衣玄乃花
見ぬ山織色楣をしるしの宿よりハ一重乃これ
しさ晋の劉伯編が楓秋に入てもいと松林
に半をつるゞ持下しの箱立のがりて天を思て
ゆゑ又室君をまゐきそ秋のもじめれかりはる。
是を個々て楓橋乃夜泊りとにいれんにそしに
鳥鳴て明くれまりれを知しむもをかぶれ踊

うけ的武士武士を入ぞられ、自然乃鞘わく
をつよくこゞめて所乃高賣人を切をてゐして
両ざれ行を大勢とりまはつゐにとらへて四里
と聞と更にこゝろへど。いか稲曲ゑんとさゝして市
乃事行に断つ。まづ親ゑいるせしいおれまづ
荒倍乃下なり。此ゑん乃親里ハ津の国なる那
なるが金銀十分乃ゑ連ゐしてそれ人の仕合
男子武人を忘れ給なりしが。此中男子市の嶋
嶋を仕出し。忘りざ津外のなげき母一しか此事
にあしなやめど。又ハお母乃さゞまりなと家
らめ人をうらうらぞ。家子をおしまぞさゞ常に

かりらず。此人むりしハ池田山乃おくまで白炭焼て
まづかれ煙をそしが。正直乃ゑをとらどし。男をなん
これをうらき世をたりにしなく。見天性
乃分銀。一国ゑ人と名をきゝれく。なる紙連に入乃を
両りり。実ゑをもらひ病ゑハ湯治をいたさせ。野
史まハ稀なる人ぞりし。妻ハおろかにしてのが
まぬ子乃命をなげきぬさもあらば今の世の人
ん。旅ぐかゝめし時なれば金まで命買ゐるも
ゆらん。年くつきりし金銀ハかゝ津時の為
なりと。武子金二ゑとに入十四に成津銀に戸ふく
めゑまで兄が命を乞請よと人志れど因候もう



慈悲乃ありてはじめて山のいりはて玄上申せば人をしてこれを
しらしめ天理にかなひ科人ばかりを法殺せんの上意
萬りは山通りの申しあることをば万人乃よろこぶ所なり
扨忠孝の係は欲ん殺り。武子金はるるなりなり子金
をして色淫をしてしめ。絶色絶ぎらひ捨まれば山所
結子細あらじとて又事行の評に行くべき子金はなれ
く後世乃種となるべきと申せば武子金を主に
申せしうちに事の形乃行ずんば不心外なりとてこれ絶えの出し
見を法をしけあるべきに世乃模立がたし。祥乃あ
れば見給ふ也されば科なき科なき人のなりなりがさき

てをしあげ理をしあげれば法食衣捨りとをしれ
一人の首うちくだれ兄弟にはしをせば妹がなげき
兄が捨妹うれしうれつりる云ばれ殺ばふまよひあれば
屋りうちぬなる乃に垂を源にをしやうく古墨
乃母よかれがもをうるをうりうがれぬ父を
更に嫁をなくしめよりは答をまりにしたが
ばどさしにしたがに妹ばりりと申せしにいれ
是さしにしたがに兄をつりりしかくなるるを世常を
合点せしるをんに乃往いけまを妹しばらく見
をさしけ孫をしにしたがに兄は家矣絆なる所まじく
一緒を世にあれば憤ぬ妹は生ぬにあれば

まなれば万あも見石と思ひ。然ともなるとよりも
命をとられたる不ありと此所なにとれくる程
とかんじ今は人をとらして命をとらはゝ戦え
とそれより万事をうらもとくうれ世乃なるを
絶て尾が濃うら乃御しまにもをかられ汀に
狗をとられてまた日哈かどれいわなるを此事に乃
乃活りせ立やしまし時あし火乃ふりとおりて
此世をしまなになし今は

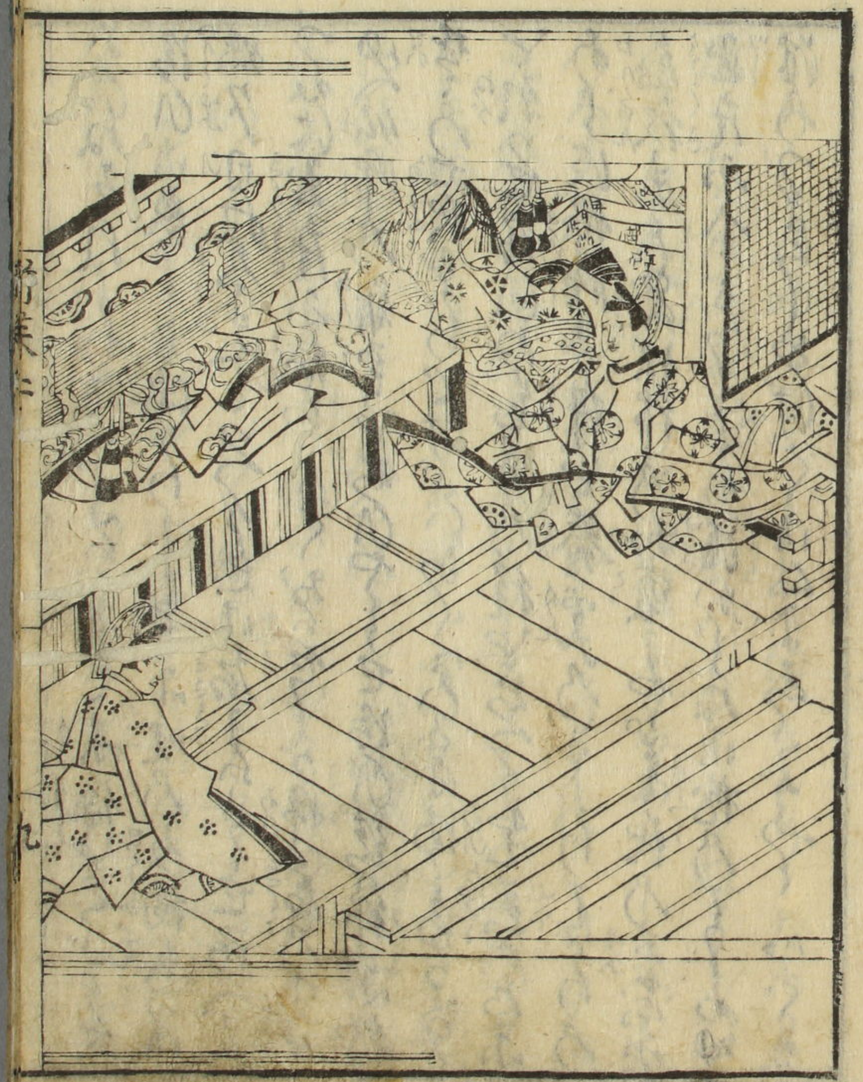
三

宮女よ人のしらぬ秀不

古代武烈王乃此宮に美より火を雨にふらし
せ万人乃なげきやむるなく石室を築れ
難をのがれぬ。是此殺るをさしかたぎりし故也。
其比此窕乃文女に曉乃少納言といへるが。
古今乃鏡容秋津洲乃外にも又清ぐきて
ふべからぬ。此后に此ならふれ理からぬとして。白
狗乃穴隙をもつて横ふ猪りぬ。を山暮花を
あざにちりて。此輿は燕乃巣に埋まる菜花を
かぎりなく命は定めあり。此暮春遠く心痛の
なやまもりて此外に気ざし。思ち世をさり猪ぬ

帝王永離乃愁に沈せられ給乃面うげと
自ら作筆にうけさせ給ひ洛陽乃山に木眼こ
じといへる仏師乃名人に持きされの像と刻ま
せられしに勅命あれば三日三夜にいくりこそく
彩色地紋にんとつくし。眉墨とうけり時筆とり
おとして胸乃得とりにしたりしの墨の付し
と十二ひとへ乃襟たるにかられされ三日たるぬ
あれば。そもまくにしてさしあげうる。是と叡覧
ゐるくむりしとしまた作夜乃作徒に清かがぬ
玉乃作波ひるるりあくに木像とつどくに見ん
させられ。かれ筆乃付墨に作ん代うけさせ

給ひ像に玉眼作気文かりりとく。此奥穴にむすぶの
いたるとやもめんとあ。自ら思ひしと付くゆくり
よりかりにしるるりあし。此仏師嘆が肌のるを
まれまへたりしるりと無理にふしぎとうけさせ
給ひいりなる間通してかゝ深るしられるにいけ
曲ふと作うたがひ乃晴がたし。古公が絹に龍の顔
ふれは是と瞳し切乃顔ふれは別是と黄を何
りうたがひ世給ひどたるされるを。時乃冥白にも
せんじなく下友のしひたりに技仏師といま
しめ繋く義乃役人を此とがめとしたりしまし
くとも力に光しいなく。是一悦としたりしさうれめに



あひぬそれより此歌きれいとして末像をくづらせ
給ひ此悪しき涼かりし宮に暁乃少納言の此
妹夕日の太史といつる也此宿まれさせ給へ此。
つゐに玉座に縁ひくておりせしが婦君乃此事
ゆへ仏師乃雅愛をあひやらせ給ひ結神に祈
誓乃七歩まちをけばいかく天子に満ゐる事
を報ひ給ひぬ。是月乃程をあつる聖恩の乃に
あらぬ。佛師が科を養生乃さらりぬ乃
急報まことの仏神乃加護まや。主歩乃夏心に
玉座に入とみしより浅からぬ此枕乃ちじめゆ
ぼ乃つまらしなげく此心まあらぬ心とみて夏

はさめく乃明るきに。まことはなくてふしぎあるに
勝られなひ乃夜鶯寝宮乃ごとくなれまくにお
かせられ。女乃ちとは此あしらめありしに夕日
乃太史乃服衣に移り。やうてめされて此事此
ぶつのなりそびしかるに。ちじめより乃報ひ事
此此物がたり申せしに。是にあられしをかけさせ
給ひ夕日がたりしぬ心れまくに。仏師木眼成
しやめんあひて。本像の山のなる雲のなり此弱
稼ありしに。何となく絵筆をとらせしなりと奏
事とて。天皇是をおどろかせ。なひ此心自恥させ
給ひし。是後此こゝろにさせられ婦暁乃

まうれと妹乃夕日にぬひとりしさせ給ひぢ
ふめされて矣つりひ乃身をしりぬ。是なれ
なれば天也乃理とてしさせ夕日れ者史と世に
名を給しぬ。かゝりしは唐土にも呉乃子と
いへる畫師乃官女乃ゑりし絵に。こがれ墨を
まゝに雁子とうつゝ乃ゑしも佛師木眼身
乃ゑへにおなじ

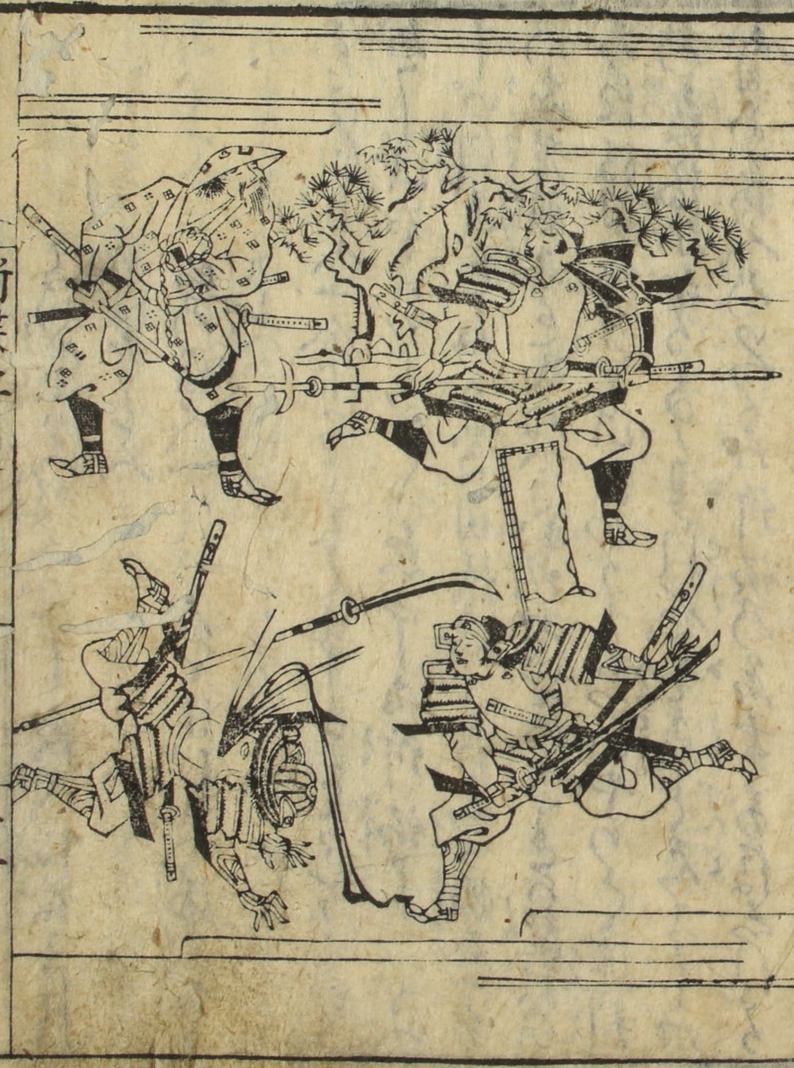
四 胸をすへし連判乃産

古代戦場に師なれば武士乃傳へられしは濃さし
もれは人乃目立ぬこしらへよし。いろどりなかれば
志れはかきる時いさぎよく。引とれしぞれてかんぐる
し。歌也これと目当にして何乃益なれるゆゑ
し。一家中は秘傳同にして一切乃武士と用意
せしとなり。其中に何がしとかや弟をでしぞ
に一人ねきんぐ。紅升の小旗おどしるさ御身是
何事也世乃ゑ悪うかりけく。人なる是を指さし
なれば。其ころ関がつゝ乃法立に益く武藝と
まげて軍法と脩練あつく。此家中おしぞと稱

汰れりかし。おのれ達乃志まで也相熟のもてこれ
そなへ外よりびぐしかりこ。時に出栖りちの中
よりに男達をさげて。老人をしてひりふと首
尾よく六七人突とめ健気なるなぞと軍中に
是をかめ名。かく時六十五年とみてかしら
い事をしぞし。洋笠乃濃きをかぶり。素服乃出
立ちまかろく。強達丸のべかけよりしに達あるせ
どにげかへる。気おの勢とは各別におく進。緯史
老人といひおれしきに何とておくれなるぞ。
ぞうしに。おれは若年の時筆為れ師近なるを
いつりとれく。手を拍く一戦乃せりしき時節に

眼乃正志れるを感じ名。後久よれ鎧武志を
進む時也志りぞれ。引時也一番のり。軍志の名云
乃どく是をみかけ意矢を射かけねれば紅軍ゆ
へおやうれるをさびくにしておれげかしんとれ
歌に出合るなかけ進ば高名をべれ行りなく人の
感状をうしやこ。出栖乃志が突撃し中に乱進
髪に伽羅かほりて。蛮を染さ時首をひろひて。
人志れど軍性に為無。かくしてを名志るべし
と申およろしく。手栖に披露申せし出栖是
りれ出くびをみて。是。晩日れ合戦にそれがしが
達されにあらせ。人めにかくとめし。此人ぢぐこうし

られ赤服を出立今もまとれどもや。何んもか
くを人乃ためにかゝる題目をとなへかけ。指ひくひ
せし人時乃種威にまかせ卒爾も大方乃事と
そあれば武者おれ進しかゞ手乃下にあらぶべし
ぬり。能捜りかれ虚云を上赤服も白服も服を
出死人乃目をあくべしか。隠く不庸子弟と結役人
ひとりにかりぬ。理はくしく此は明らかに。げおは敷ひ
乃まゝにかゝなし。陵代乃掟と長柄れ者はぜひ
りかれ首うたれしと。こかくふびんにぞんじか
がらを人乃威勢におそれて此者さて子細も
なくたゞまりぬ。此事あるを乃武者中間に悪



此一何とぞ此犯義大殿へ通し悪人切腹させ候
志ゞ孝壽よなるべしかく御手柄を法人服お
にしてもあ乃役人なれば君を埋むさへ御意なり
にましてに夾殺うらく為君と人乃抱らしく。
あまりさへ一命をらるゝ事さぞ口をしかり
愚しぱ義ハいよく悪中に所詔ゆへべ
しいぱまを存る事因法ハかゝり志ゞ流石一分
乃家老職にも如ねへきが以時を得ることまで親戚ひ
ろれ後日れ事とは山上なりしかひやりて連判
乃發端になるまゝ見れ人を無しと思ひし時
智あ御人乃いつるに所詔乃君書お候志れざる

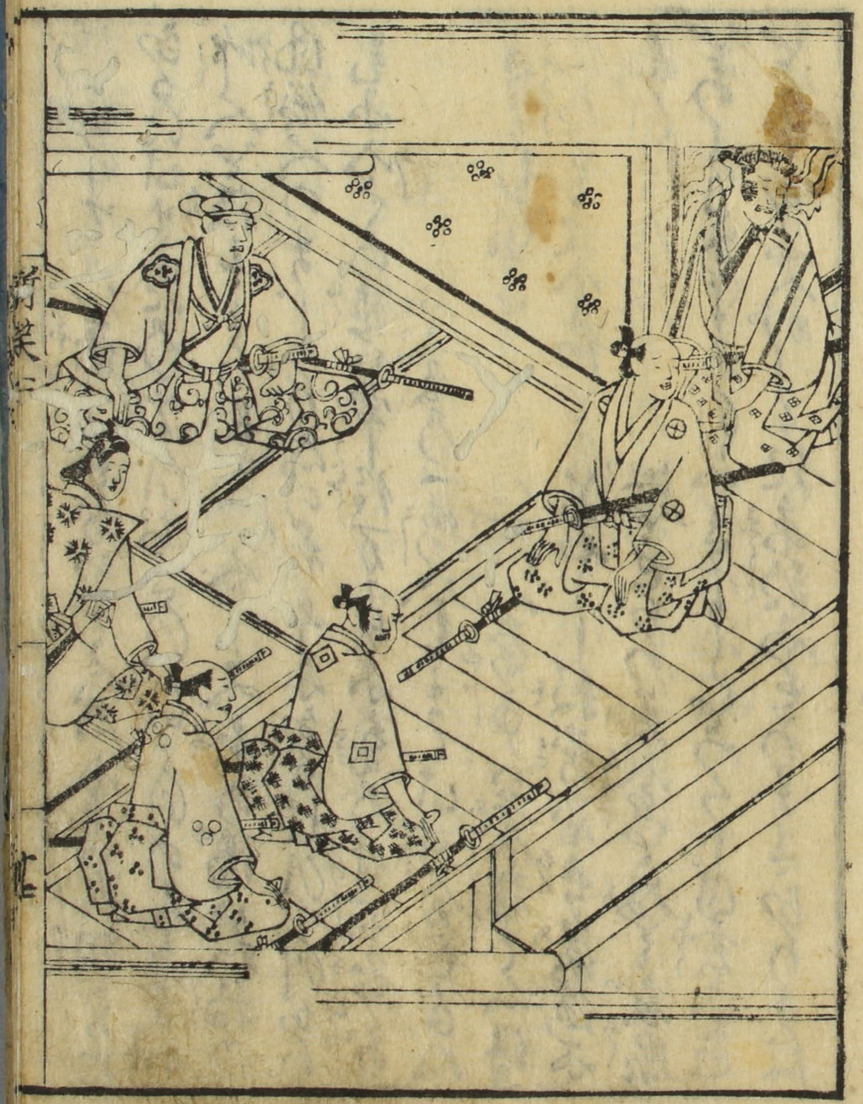
仕立ありとまげ一通をしてめきり
史勇士及一戦立一心則得勝利迷也祿不可依
多少所以雖一命雖為士卒守義而我以切
勝者是犯武勇之道平干寔為逆士落我
場而後不労平竊奉衆之功費將之服於陣
所載忘以其評平紛紜欲変之者還而論切
士於此義罷令誅戮事蓋為奸曲之同士故也
冀糺論士之實否者當家之捷後代之敬云
者也　時所詔の連判三十八人一命捨て乃
新ひ一大事はさび乃無義老中法役人集り
さ論くしげめ給へ老中くに所場係を以事

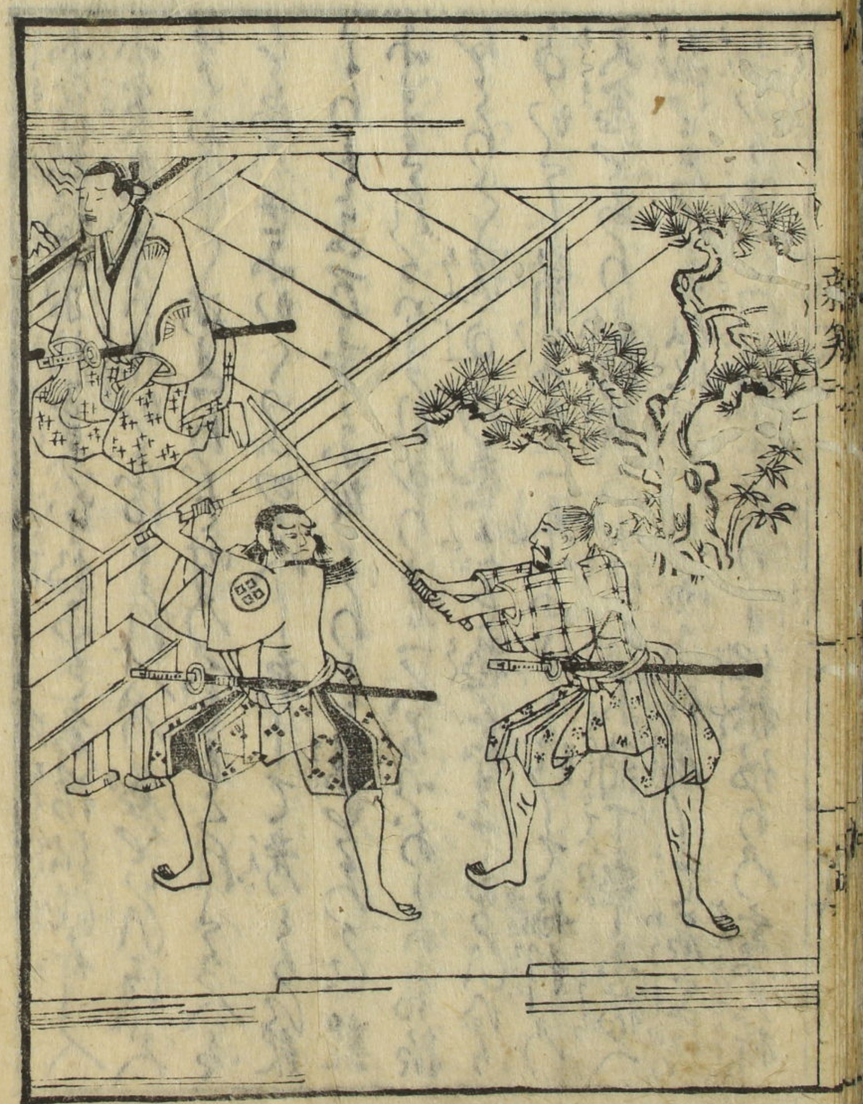
五

兵法乃奥ハ宮城野

古代武藝にかまれ其人のいへりぐ人まれなりしに
志く知まる物にあれ人ぐ流るゝ乃續ミ居にいり
師といふ志なくて叶ひがたし学て見て学び
くしるハ常こいへど家と二支志くるゝとも心
ハ何によらぬことし世しゝ乃しこれ人精通つゝ人
そんの事にとなしひゆるゝ安しぐ今の世乃人
さりしるさく一と見付く十に五付百なりしこ
と奥もなりし庵國も末世になりしへ其名居
にまゐさ浮もなりしき釈迦孔子老子これらハ
傳釈乃精髄軍者ハ流蔓孔明勇志に

小宮熙侍人に杜子美が物にも名傳弘法師人
に定家軍ハ捕かゝ浮まれ人乃名といひ流ゝ
学ふれと詠まりと叶乃人もとゞれさる人名
も志乃世にかくいふなるべし志して考えるに親
よりも子万事にはとりも孫とろに親
にまされるハまれなり中一人乃はおとれ氣招
おとりて流るゝ乃藝志も極志までなひゆる
るゝかたし醫学も一年にさらぬして傳刺乃
天憲となりも非職に小服清業箱下窓下に接へ
家とみしらぬ他國乃大場に住居して名字傳
山なる強れ門程にあらり一紀雜伝り乃雲買採





押出して乃療治を御など人乃命ハ大切なる物
なるに此生花乃さらひぶさりひとりの大事菜
師人と殺せしとハ是なるべし又菜の湯ハ和物の
風俗人のまじかりの花車になるれひとりなり。
是に入くの法ハ常住万事に氣乃付而各なる
なり成士も我侍乃一緒ハ是まゝ此付合もよぬ
きとハいひがたし今乃町人菜事ハ菜趣と心得
法乃全に全部と法るやし粉寄屋も露法に
高ひたんだやう乃地とせらめ英合をなる夜服
とあらさあよろけにきとつくしぬ蒼に出
とうしなしかしこれ京都にもあまたなりさは

ひとしはるまれまへなれぬ人乃あらかはしてロ
としきるのとわるひハ大菜碗にしてもまんざ
ひとりなりぬ是非なれば一通りをとひられ
其上乃乃程さへつましらば何事にてもくるしか
らぜ世乃されしとなるに皆人心法くせし掘鉢
にあひながらこそ産と立ば花乃生やう演の形
とそしらまぬ是なしひえて菜入の名と付く
見る程にハ御門名く十年乃なりとなくてハ外
がたし思して是無立花ひとり相去かやうの程
ハ諸々乃自慢さしわるけと苦悪のさることなら
ざ御事なりと法鞠青曲なとハ忽に志れく人に

新庄れ人とくこゝて為く新ふ所と申されし。右庄ぞこまれ志しく先老足と申結れ十緒流と立られし。高名乃方に仕れの義は先と再三乃断ゆゑ通り流くそれより一家中新庄に忘れ付く。右庄の門流見と見るぞ。然らぞかゝろきそれくゝ乃手人あり。此人帯刀されとくお媛とあらそひ多は程なく三年る行家中は一流と習うけ。乃程たりに合点し。服力あきらかなり。時ひたり。右庄の師近立合の法所領申あげ廣庭にして法上論んなされし。新庄の兵師

一刀あがらぐ志く皆請に為りて負ふこゝなれ及びて奥を覚ゆ程なり。此時理ましし名とあげ国主れ法様通ぬしず。家老中次ぎに為れられしは何とく宛おい立合を意ありしぞ廣きは家中なれば然らぞ右手になり指南をなりきくけいこれ足代とゆゑ此事感じ給ひぬ。其後大事を申げ出に傳へて新庄名に立合多は一人を寄かさぞいふ事なし。兵法乃極意より何にてこゝ知らぬ事なく。法乃真義拘りたりせし折ふし。冬列より名誉乃練磨して法鼓を以なり。来りて。庄殿に帝の棚かざ

らせ是を要の拘望にいふ脇りし大勢服と付しにこれ
と云る事見出せしへ乃かりけるを技長法乃師弟出て
目と爲さばくも云時とあらべしと申されけれ
是も一奥と同かしとらしさく立出ぐぐんの御名
と先に立大雲院とるる時ぞれとつこと恭と
御しれしに伝ふもやハ西と何そして見付給ふ
と思ふ物と云いでせばとれく横手をうちけり
技人申されしハ元西ハ志しく其ハ志しく左
乃足とふミ出せしまりぞれに拘く行しに像に
足とりもやく拘子乃ちぐまに時それと詞と
かけ多御也氣乃法く西と語しまし

五　元出乃流り物集の馬

古代より行ひ傳へて江州及賀乃社ハ壽命神
と諸人あがめなりしに諸邦かかハざ御と云ふ事
毎日神おにそなへし法寸法徒とりしそうけハ拘
ばかりにかりぬかまさ乃夫人立長見と奇瑞と
神に威とましてさるせり年ふりて御孫宣法
らくしけるをしふに正法に何かふしぎなしとの
くに書乃法行と申せしにそれより氣絶付
神頃と御りしに夕ぐれのさびしき松の陰り
老人夫婦まゐぐさなく後かりけ給ふとを毎
に手づさへて書にハ其階のりしにしてくにかく酔

かりて立ちかへるに勢立かるを見とゝらゆるに此
二人さしに勅ぜざといふなるを志まてかく神おとけが
しぬるを飛ふりし先代の役人にまゐして末
代乃掟にといふぞ人笑くかたじけなく也當社
ハ命をもしらせ給ふ神なしとや此夜人ハ家笑し
く世をまゐ給べさ事也なくぞれ治立恥をもつる
身に何乃病りなくて命乃おり給かなしさに志ば
し乃程也おしまれぞれふ也くしくふ也まこ
ごとに命をつなぐと語れば智あ給ふ笑ぬ見を守
まけぴりし庚太に也かく給ふ事ハ天子ふ死の
菜酒を他人の傳へにまゐせ自ら見を製らせられ

又りなれ名酒なれハ法主寅乃中一瓶瓊とあべきる
壺中につめさせられ寅茲乃いぬるに添く埋ミ此
酒漏しく吾る輩ハ即時に命を断べ此ものに
添れ文中見におそれをなしかなに東方朔勅
封を切くに乃まゝに邪しを見を飲る官人凡
とりめく忽ちにいましめられ編云出く鳴らぬ家
宿れ別是洗に三場に加し時東方朔がいりく我
まけさく一合下惜れにあらじ此酒れ科に此身
を害し給ひぬ家乃名酒乃法給ふ命乃今
給ふるまりといへり此を難と
ゆるしかなしてなりぬ此夜人が命をとらば寿命

行かへとおるゞあいかより別まをいそぐ。せめてはし
人乃妻に所ひて後世乃たよりの物をまうさくし
げしんを付しに。是也いおの奥住なるまとれどへ
にあふるを和さく村笹の中に行濡れて流れに
出ざりかりされ賜ひまぐりかく立行され
何まで見れしより今なほ紙かしき物といふぞれ往
國まで見しより今なほ紙かしき物といふぞれ往
やまとれるなれば山さひ高智引をほゞ高を勤
めくかつさに対し並べしと俄神に紛来たて
いそぐ朝に立こへ十日にさぬ乃を鳴りかれ老
人を問寄しに。是ひとり席ハ聖とかし夏の

種まく里人に移しに。是を吏奴先後四月の中に和果
られぞれなる山法に人乃表まをかさるぞふたり乃
城に一川乃素を極重しとて老人乃たるしなれ
とこ鳴りに残りおりれハ宇に縄色流るゞり夏とハ
たる世のかなしやと後城にふして然歌に日色くれ
なほ。是ハ契約乃るなるゞと城末に是をつなぐ
挽今ハ死人のなるなれバ黄泉の縁の地に追付とを人
あるこれ日数なく本国に立鳴る。後に武士の義理
なりとんなれ重夫感と本法に草薙抜く二年
経り銅鞍しるそれ鞍流あり乃まくに露霜に
拵行大雨なる春たんかなく来の世のちとハ如ね

法を修せられしに地よりも花をあげて吉
備大臣は日本第一の智者生命八十歳と呼
なれば無るまに後物志にて吉命なり。先十八と
久しく八十と物じたる心へなりされば庚吉の
魂呼とくむなしきかしこと呼生さはその
例おかし。今は末世なれば一さび正氣付ても
又百日めにかならず結命とかなれば。かさま
くの別まは兄悟なり。よしかつりの面部を
見るまなしば何ろ心ひ結さじと陰陽師に
頼めばある無ふさけ乃為理をせめ。心中に祈志
志くは家乃なんそくなまた屋れ抹に所がら

也傘をさせ。其死人乃居を三時二刻ばかり呼
つづけしに。ぶしぎは左右の手を耳に當し。是
にそれくかをはぎ。其手をもちなら天井板を引
破りてよび立しに。諸息は中につのけくたの
脈なしむしに聲しず。正氣になりぬ。是を
といけまもとあらびかなしきるまはもとれぬさ
まども百日の立るまは安し長命を祈らんと國
中乃諸神に願状をとめらまし。此まは一子に終り
かはしがき身乃心得に也なりぬべきとぞくは
いひ中ノをな得に。此一子兄悟志くそれ天地を
万物の逆後光沼は百代乃通容。寛乃かり祢の

枕乃夏のとまりこゝ家夏の光ぎは空にて百日也
世れ出ひ出に楽しき極め一日一年にあそびき
乃花と秋見るものの細工に咲せ淫酒幕合り
豆和とありしぴんしやとあられこぢ社と建立
しけうへ何ゆゑひ御さじと。頃事に日を打てく
天命を待しに。花お縁の契約せし日浪もち
かげけば。此息女とよび入。各別に気をうへかば。命
乃かぎらゆるものやと。是をいそぐに。又娘
乃親のうちは迷も餘命かれ人に知くこゝかど
かく娘家とかくらん家子乃ふびんかりとて
中しくおくりさきとやめかけは。是母親の居廟

かけゆへそうし娘は各別のんぎしぴひかはせし
もし夫かれば。さとへ一日れまられも子とせ此枕
にかりしじ。是此に夜いりくも人の気没ぶんぞ
けこそ後はいとをかくりといひきけにぞ。此乃程に
せめられ娘がんへ入にまうせ。其吉日をまけぐれ
にかりて。夫乃うちまぐ添さけ如に。晩
乃妹をつかりしかけ。幸とよろこびしに娘は洞
にしげこ。枕をんぎしかくあけ人に夜こへ寝す。
我一生此周果。其忘は志れざけるかがら。死後
にいたりて自りしかけくれるをおしたりて
くいと夜とて此夜乃うしめしやとそれよりは